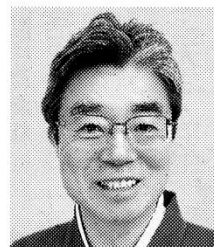




永田 円了
真国寺住職



楽しいことをしていると、なぜか時間が早くすぎる。何か初めてのことを体験するときも、時間の経過は早い。一方、退屈な講義は長く感じる。入院中の一日はうんざりするほど長い。時間というものは、人それぞれ、その時の感覚である。

時の経過

先日、自坊で「夜坐の会」を立ち上げた。初めての方を対象にした夜の坐禅会である。昼は石材業者の出入りで、物音が気になるが、夜になるとかすかな虫の音が4千基の墓石にこだまして静寂を極める。一炷45分間の坐禅を体験した参加者に感想を尋ねた。

初心者に学ぶ「智慧」

「足がしびれた」、でも「意外と短く感じた」。この感想には少し驚いた。普通、坐禅が初めての場合、慣れない体勢は大変で、じっとしていることが苦痛というはず。坐禅の間を短く感じたとは意外である。短く感じた、ということはおもしろかったということだったのか。

人は好奇心、わくわく感をもつ。頭の中のコップを空にして臨むからである。「禅マインド ビギナーズ・マインド」の著者鈴木俊隆氏は、本の冒頭に、「ビギナーズ・マインドには、多くの可能性がある。しかし専門家といわれる人の心には、それはほとんどない」と書いた。経験を積み積むほど、人はそのことに熟練していい仕事ができるはずなのに、可能性がなくなるとは…。

なるほど、三十数年間、講義と講演を続けた末に、世間的には専門家というレッテルを貼られ、その枠の中でぬくぬくしている限り、新しい可能性があらうはずがない。その通りである。講義初日のあの初々しい初心が思い出になつたらおしまいである。時間は慣れをつくり、慣れは新鮮な目を奪う。坐禅も熟練がいいとは限らない。逆に初心者のもつ透명한意識そのものが禅である。専門家は「知恵」を働かせ、初心者は「智慧」に委ねる、という。知恵とは、学習で身につける後天的なもの。智慧は本来人間に備わっているもの。心が何事も受け入れ、そのままの姿を映し出す鏡の存在。まさに生まれたばかりの赤ちゃんの心である。

知恵より智慧を生かすことは、果たして海千山千の現実の中でできるのだろうか。最近新聞の記事にハッとするコトバがあった。「どんな恋愛も必ず時間には敗れるものです」。これを禅はどう解く。